

# 美女と野獣

—アニェス・ニンフェットとアルノルフ・グロテスク—<sup>(1)</sup>

一之瀬正興

モリエールの生涯は、演劇人（作家、座長、俳優）としても、家庭人としても実に多くの紛糾や破乱に満ちている。

モリエール一座は、1658年、長い南仏巡業からパリに帰還し、評判どおりの好評をばくした。その後1659年、新作『笑うべき才女たち』によって決定的な人気を勝ち取る。しかし、それと同時に、この作品で扱った主題が当時流行のプレシオジテの風潮を批判したものであったために、早速その反撃の的になったのだった。

しかし、モリエールは、敵対者からの批判・中傷に屈することなく、次々と問題作を発表していく。そのような反撃は、モリエールの扱う主題が時事問題中心であってみれば、避けることのできないものであった。時事問題を扱った主な作品を一瞥してみよう。『亭主学校』や『女房学校』における娘の教育の問題、『女房学校批判』における喜劇の規則の問題、『ヴェルサイユ即興劇』における俳優の演技の問題、『ミザントロップ』における社交界の偽善の問題、『タルテュフ』における宗教上の偽善の問題、『町人貴族』における町人のスノビズムの問題、『女学者』におけるプレシオジテや女性の学問の問題、『飛び医者』から最後の作品『気で病む男』に至るいくつかの作品における医学と医者の問題などである。

上記のように、1661年の『亭主学校』と1662年の『女房学校』は、娘の教育、娘の結婚を主題にした喜劇である。貴族文化の爛熟と、町人階級の富裕・台頭の時期にあって、女性の解放を含めて、女性の地位、女性の教育、女性の学問、女性の結婚の問題は重要な時事問題であった。当時のサロンの女性たちは、おしつけられた強制結婚には、結婚前の親の横暴と、結婚後の絶対の主人たる夫の横暴という二重の横暴があると見ていた<sup>(2)</sup>。そして、この作品が一連の「女房学校論争」をひき起こし、モリエールは『女房学校批判』および『ヴェルサイユ即興劇』で敵方に答えたのであっ

た。

ところで、モリエールの喜劇においては、娘の教育、娘の結婚などの主題は、これら2作品に限られたものではない。むしろほとんど全ての喜劇に何らかの形で組み込まれていると言っても過言ではない。しかし、『学校』2作とその他の作品を比較して、この主題の扱いにおいて異なるところがあるのか。また、数多く登場する娘たちと比較して、あの魅力的な清純・明朗な娘アニェスは、どのような位置づけにある人物像なのか。ここで改めて検討してみよう。

\* \* \*

喜劇の登場人物としての娘はいたるところに登場する。モリエール以前の演劇をみてもそれは同様である。田園劇や喜劇<sup>(3)</sup>において、その主要なテーマが若い男女の恋愛であってみれば、それは当然のことと言えよう。主人公たちが、羊飼いであれ、町人であれ、貴族であれ、その場面設定にもとづいて、もともと恋愛が主要テーマであるこれらの演劇ジャンルにおいては、青年と娘が主要人物となる。

さらに、喜劇が、特にモリエールにおけるように、当時の社会や家庭を舞台にするようになると、家族の一員として息子や娘は欠くことのできない登場人物となってくる。そして、その子供たちの教育や結婚の問題は、町人社会、町人家庭の中で重要な問題となってきたのだった。

モリエールの喜劇においては、ほとんど全ての作品において若い男女の恋愛と結婚というテーマが扱われている。『ドン・ジュアン』や『ミザントロップ』などのように、愛や結婚のあり方を主要テーマとして追求した作品は言うまでもない。また、多くのファルス的要素をもった喜劇も当然

若い男女の恋愛と結婚を主要テーマにしている。

一方、時事問題、つまり当代の社会風俗を主題にした喜劇においても、それは同様である。人間の吝嗇をテーマにした『守銭奴』、宗教上の偽善をテーマにした『タルテュフ』、医学や医者の問題をテーマにした『気で病む男』などにおいても、若い男女の恋愛が筋の伏線となり、重要な二次的テーマとなっている。

例えば、上記3作品の中の父親と娘の関係はどんなものであろうか。父親はきまって頑固で偏屈な性格を備えている。全て自らの利益や意向に娘を従わせようと考えている。当然のこととして、娘の結婚についても親の決めた男を婿として押しつけるという態度に出る。

もちろん、このような頑固でけちな父親像は、喜劇の伝統からみるとコメディア・デラルテやフェルスに起源をもつ定型人物である。マニフィコやパンタローネがこれに当る<sup>(4)</sup>。

『守銭奴』においては、アルパゴンは息子と娘にそれぞれ自分の決めた相手を押しつける。息子クレアントには未亡人を、娘エリーズにはアンセルム氏を決めている。そのアンセルム氏というのは、分別があり、年齢は50歳にもなっていないし、何ととっても金持ちだという。

Oui, un homme mûr, prudent et sage, qui n'a pas plus de cinquante ans, et dont on vante les grands biens.<sup>(5)</sup>

ヴァレールの問いかけに対して、全て機械的に「持参金なしで<sup>(6)</sup>」と答えるアルパゴンの姿は、彼の吝嗇と頑迷さを戯画化した象徴的な場面である。

エリーズは、結局自分の方から積極的に父親に対抗する手段を持っては

いない。

『タルテュフ』におけるオルゴンは、娘マリアーヌの意志に関係なく、自分が師とあおぐタルテュフを婿として押しつけようとする。主人思いの女中ドリーヌが、何とかそれを阻止しようと懸命に抗弁するが、オルゴンは断固として聞き入れない。ドリーヌの意見を聞く必要もないし、タルテュフが娘の婚約者ヴァレールより如何にすぐれているか述べたてる。

Je ne demande pas votre avis là-dessus.  
 Enfin avec le Ciel l'autre est le mieux du monde,  
 Et c'est une richesse à nulle autre seconde.  
 Cet hymen de tous biens comblera vos désirs,  
 Il sera tout confit en douceurs et plaisirs.  
 Ensemble vous vivrez, dans vos ardeurs fidèles,  
 Comme deux vrais enfants, comme deux tourterelles;  
 A nul fâcheux débat jamais vous n'en viendrez,  
 Et vous ferez de lui tout ce que vous voudrez.<sup>(7)</sup>

マリアーヌにとって、父親オルゴンは絶対の存在であって、ついに抗弁することさえできないのである。

Un père, je l'avoue, a sur nous tant d'empire,  
 Que je n'ai jamais eu la force de rien dire.<sup>(8)</sup>

このように、マリアーヌはやさしく無抵抗な娘として描かれているが、実際当時の家庭における娘の立場はこのように無力なものだった。

『気で病む男』の父親アルガンも同じ性格をもつ人物である。娘アンジェリークは恋人クレアントと結婚できるものと思って父親にうち明けたのだが、父親の方は勝手にピュルゴン先生の甥で、先生の義兄でお医者さまのディアフォワリュス先生の息子であるトーマ・ディアフォワリュスを娘婿に迎え入れたいのだ。それは、病人である自分自身の体を診てもらい、薬を処方してもらうのに便利だからという理由だ。

Ma raison est que, me voyant infirme et malade comme je suis, je veux me faire un gendre et des alliés médecins, afin de m'appuyer de bons secours contre ma maladie, d'avoir dans ma famille les sources des remèdes qui me sont nécessaires, et d'être à même des consultations et des ordonnances.<sup>(9)</sup>

女中トワネットの策略によって、アルガンが亡くなった場合、後妻ベリーヌや娘アンジェリークが如何なる反応を示すかが試される。ベリーヌ夫人は完膚なきまでに夫アルガンを悪罵する。それに対して、アンジェリークは、父親の死を深く悲しみ、クレアントとの結婚をあきらめるとまで断言する。父親が亡くなった今、生きる望みもないという。そして父親に反抗してきたことを深くわびるのである。

Ah! Cléante, ne parlons plus de rien. Laissons là toutes les pensées du mariage. Après la perte de mon père, je ne veux plus être du monde, et j'y renonce pour jamais. Oui, mon père, si j'ai résisté tantôt à vos volontés, je veux suivre du moins une de vos intentions, et réparer par là le chagrin que je m'accuse

de vous avoir donné. Souffrez, mon père, que je vous en donne ici ma parole, et que je vous embrasse pour vous témoigner mon ressentiment.<sup>(10)</sup>

このように、娘は素直で従順で、父親を恐れ敬っている。

アンジェリークの妹のレイゾンになると、それはさらにかわいらしく、あどけない。父親アルガンがレイゾンを鞭で叩いて、アンジェリークとクレアントの関係を聞き出そうとする場面は、当時の頑固な父親の肖像であろう。

このように、モリエールの2,3の作品を取りあげてみても、頑固な父親と従順で無力な娘という定形的図式が簡単に浮かび上がってくる。また、このような設定は、『町人貴族』や『恋は医者』など他の多くの作品にも常に取り入れられているのである。

喜劇においては、女中や下僕の活躍、またはモリエール的幸運な幕切れによって、例外なく父親のもくろみは失敗に終り、娘（又は息子）は恋人と結ばれて大団円となる。終幕に至るまでの起伏に富んだ筋の展開を眺めて、観客は楽しい笑いとともに、若い恋人たちの恋の成就を祝うのである。しかし、これは喜劇の中の結論であって、実際の当時の家庭における娘の運命は、このようにうまく運ばなかったはずだ。

モリエールは、『スガナレル』において、もっと具体的に父親の言い分を描いている。『スガナレル』は、小心で嫉妬深い亭主スガナレルが妻の不倫を疑って引き起こすドタバタを混えた愉快的な作品である。これに加えて、ゴルジビュスの娘セリーと、その恋人レリーとの恋愛・結婚が伏線になっている。そこでは、父親ゴルジビュスが、娘セリーに対して、娘が如何に父親に従うべきかを大音声になえてみせる。父親の命令は絶対であ

り、娘たるものは父親に口答えすべきではない。さもないと腕にものを言わせることになるという。もちろん、前述の町人階級の父親たちと同様、婿は金持ちであることが条件なのだ。その男がどんな男であろうと、2千万フラン持っている男なら、立派な人物であることを保証すると断言する。

[…]

Je n'aurai pas sur vous un pouvoir absolu?

Et par sottises raisons votre jeune cervelle

Voudroit régler ici la raison paternelle?

Qui de nous deux à l'autre a droit de faire loi?

[…]

Vous pourriez éprouver, sans beaucoup de longueur,

Si mon bras sait encor montrer quelque vigueur.

Votre plus court sera, Madame la mutine,

D'accepter sans façons l'époux qu'on vous destine.

[…]

Informé du grand bien qui lui tombe en partage,

Dois-je prendre le soin d'en savoir davantage?

[…]<sup>(11)</sup>

そして、娘が何を読むべきかを説く。マドレーヌ・ド・スキュデリーの『グラン・シリユス』や『クレリー』の小説は読むべきではなく、もっと道徳的な読物、ピブラックの四行詩や、マテューの『生死帳』や、スペイン・ドミニコ会派の『罪人の導き』を読むべきだという。



[...]

De quolibets d'amour votre tête est remplie,  
 Et vous parlez de Dieu bien moins que de Clélie.  
 Jetez-moi dans le feu tous ces méchants écrits,  
 Qui gâtent tous les jours tant de jeunes esprits.  
 Lisez-moi comme il faut, au lieu de ces sornettes,  
 Les *Quatrains* de Pybrac, et les doctes *Tablettes*  
 Du conseiller Matthieu, ouvrage de valeur,  
 Et plein de beaux dictons à réciter par cœur.  
*La Guide des pécheurs* est encore un bon livre :

[...]<sup>(12)</sup>

このような厳しい父親のもとでは、娘は決して反抗できなかったであろうし、結婚は父親の思うがままに決められたであろう。

しかし、『スガナレル』においても、娘セリーは恋人レリーと首尾よく結ばれ、本題の女房寝取られ妄想狂のスガナレルも妻と和解して、めでたく幕となる。

\* \* \*

このような状況の中で、モリエールは娘の教育、娘の結婚の問題を『亭主学校』と『女房学校』においてはじめて真正面から取りあげた。

しかし、人物設定の面で、この2作品は、これまで述べてきた頑固親父と従順な娘という親子関係を取ってはいない。

『亭主学校』におけるレオノールとイザベルは、亡くなった友人の子供

で、父親の臨終の際に2人の姉妹の将来をアリストとスガナレルの兄弟に託したのだった。2人を嫁にもらうもよし、婿さんを見つけてやるもよし、2人が子供の頃から父として又は夫として万事を監督する権利が契約書によって成立しているのである。

[…]

Elles sont sans parents, et notre ami leur père  
 Nous commit leur conduite à son heure dernière,  
 Et nous chargeant tous deux ou de les épouser,  
 Ou, sur notre refus, un jour d'en disposer,  
 Sur elles, par contrat, nous sut, dès leur enfance,  
 Et de père et d'époux donner pleine puissance.

[…]<sup>(13)</sup>

『女房学校』におけるアニェスとアルノルフの関係もこれによく似ている。アルノルフは、4歳の少女をみつけて大変気に入り、百姓女と話を付けて養女にもらい受けたというのだ。その娘を人里離れた修道院に入れ、無知に育てることにうまく成功した。そして、望みどおり無邪気な娘に成長したので、修道院から出して、現在手元において結婚の準備をしているところだ。

[…]

Un air doux et posé, parmi d'autres enfants,  
 M'inspira de l'amour pour elle dès quatre ans;  
 Sa mère se trouvant de pauvreté pressée,

De la lui demander il me vint la pensée ;  
 Et la bonne paysanne, apprenant mon désir,  
 A s'ôter cette charge eut beaucoup de plaisir.  
 Dans un petit couvent, loin de toute pratique,  
 Je la fis élever selon ma politique,  
 C'est-à-dire ordonnant quels soins on emploiroit  
 Pour la rendre idiote autant qu'il se pourroit.  
 Dieu merci, le succès a suivi mon attente :  
 Et grande, je l'ai vue à tel point innocente,  
 Que j'ai béni le Ciel d'avoir trouvé mon fait,  
 Pour me faire une femme au gré de mon souhait.  
 [...] <sup>(14)</sup>

このような設定は『シンシリア人又は恋は画家』にもみられる。ドン・ペードルは、娘イジドールを奴隸の身分から解放してやって、妻にしようと計画する。この作品は、一幕物で、音楽を取り入れた異国趣味の楽しい作品であるが、この人物設定から上記2作品を後年焼き直した同工異曲の作品と考えられる。

以上のように、ここに登場するレオノール、イザベル、アニェス、イジドールは身無し子である。これまで見てきた町人階級の娘たちと比較すると、幼くして不幸な境遇にあり、一層同情をひく設定になっている。

後見役となったスガナレル、アルノルフ、ドン・ペードルは、実際の父親以上に厳しく娘たちのしつけや教育に努める。

スガナレルは、兄のアリストよりも20歳年下なのにもかかわらず、一時代前の人間の様相で、特に田舎色を強調する人物である。当然、イザベル

に対して、地味な服装を強制し、社交を禁じ、自分がコキユになることを最大の恥と心得ている。

[…]

Mais j'entends que la mienne  
 Vive à ma fantaisie, et non pas à la sienne ;  
 Que d'une serge honnête elle ait son vêtement,  
 Et ne porte le noir qu'aux bons jours seulement,  
 Qu'enfermée au logis, en personne bien sage,  
 Elle s'applique toute aux choses du ménage,  
 A recoudre mon linge aux heures de loisir,  
 Ou bien à tricoter quelques bas par plaisir ;  
 Qu'aux discours des muguetts elle ferme l'oreille,  
 Et ne sorte jamais sans avoir qui la veille.  
 Enfin la chair est foible, et j'entends tous les bruits.  
 Je ne veux point porter de cornes, si je puis ;  
 Et comme à m'épouser sa fortune l'appelle,  
 Je prétends corps pour corps pouvoir répondre d'elle.<sup>(15)</sup>

アルノルフは、スガナレルより都会派にみえるが、さらに極端になる。アルノルフは、下僕アランと女中ジョルジュエートを使って、アニェスを監禁しているのである。女房にする女は、無知であることが大前提で、クラブやサロンの話をしたり、散文や韻文でものを書くような女は願いさげだという。韻の何たるかも知らず、韻遊びでもとんちんかんのことを言うような女がいいのだ。要するに、神様にお祈りし、自分を可愛がってくれ、

針仕事ができる女で充分だというのである。

[…]

Non, non, je ne veux point d'un esprit qui soit haut;

Et femme qui compose en sait plus qu'il ne faut.

Je prétends que la mienne, en clartés peu sublime,

Même ne sache pas ce que c'est qu'une rime;

Et s'il faut qu'avec elle on joue au corbillon

Et qu'on vienne à lui dire à son tour : «Qu'y met-on?»

Je veux qu'elle réponde : «Une tarte à la crème»;

En un mot, qu'elle soit d'une ignorance extrême;

Et c'est assez pour elle, à vous en bien parler,

De savoir prier Dieu, m'aimer, coudre et filer.<sup>(16)</sup>

\* \* \*

ところで、スガナレル、アルノルフ、ドン・ペードルは、父親役を引き受けていると同時に、その娘を自分の妻にしようという、いわば求婚者の役回りでもある。つまり、父親代りの後見人である彼等は、幼い娘を愛してしまうのである。そして、各々強い独占愛にかられて、娘を自分に縛りつけておこうとする。

スガナレルは、イザベルの恋人ヴァレールに自分は後見人であると同時に彼女を愛しているので、妻にする予定だと宣言する。

Si vous le savez, je ne vous l'apprends pas.

Mais, savez-vous aussi, lui trouvant des appas,  
Qu'autrement qu'en tuteur sa personne me touche,  
Et qu'elle est destinée à l'honneur de ma couche?<sup>(17)</sup>

アルノルフは、アニェスに裏切られたことを知っても、なお彼女を愛し続けている。鷹揚な態度をみせて金まで貸してやったオラースにアニェスを取られたのであるから、二重の苦痛であるはずだ。アニェスの裏切りに立腹し、絶望しながらも、逆に彼女の美しさに打たれ、さらに恋いこがれてしまうのである。そして、妻にすることを夢見ながら、この美しく可愛らしい娘を13年間育ててきたのに、裏切りの責め苦を味わわねばならないのである。

[…]

Plus en la regardant je la voyois tranquille,  
Plus je sentoïis en moi s'échauffer une bile ;  
Et ces bouillants transports dont s'enflammoit mon cœur  
Y sembloïient redoubler mon amoureuse ardeur ;  
J'étoïis aïgri, fâché, désespéré contre elle :  
Et cependant jamais je ne la vis si belle,  
Jamais ses yeux aux miens n'ont paru si perçants,  
Jamais je n'eus pour eux des désirs si pressants ;  
Et je sens là dedans qu'il faudra que je crève  
Si de mon triste sort la disgrâce s'achève.  
Quoi? j'aurai dirigé son éducation  
Avec tant de tendresse et de précaution,

Je l'aurai fait passer chez moi dès son enfance,  
 Et j'en aurai chéri la plus tendre espérance,  
 Mon cœur aura bâti sur ses attraits naissans  
 Et cru la mitonner pour moi durant treize ans,  
 Afin qu'un jeune fou dont elle s'amourache  
 Me la vienne enlever jusque sur la moustache,  
 Lorsqu'elle est avec moi mariée à demi!  
 [...] <sup>(18)</sup>

念のため、ドン・ペードルも全く同じ態度に出ることに注目しよう。奴隷のイジドールを愛し、独占したいのである。

Oui, jaloux de ces choses-là, mais jaloux comme un tigre,  
 et, si voulez : comme un diable. Mon amour vous veut toute  
 à moi ; sa délicatesse s'offense d'un souris, d'un regard qu'on  
 vous peut arracher ; et tous les soins qu'on me voit prendre  
 ne sont que pour fermer tout accès aux galants, et m'assurer  
 la possession d'un cœur dont je ne puis souffrir qu'on me vole  
 la moindre chose. <sup>(19)</sup>

スガナレル、アルノルフ、ドン・ペードルとも、一途に恋人を愛するひたむきな心情があふれている。そこには独占愛があり、そこから嫉妬心がわきおこり、悩み苦しむのである。

しかし、それにしてもこの娘たちに対するスガナレル、アルノルフたち中年男の独占愛と嫉妬心は一体何であろうか。ここで、奇妙な名前をもつ

『ロリータ』の主人公ハンバート・ハンバートの言に思い至る。いわく、  
 「ここで私は、つぎのような考えを披露したいと思う。それは、少女は九歳から十四歳までのあいだに、自分より何倍も年上のある種の魅せられた旅人に対して、人間らしからぬニンフのような（つまり悪魔的な）本性をあらわすことがあるという考えた。この選ばれたものたちを『ニンフェット』と呼ぶことしよう<sup>(20)</sup>。」ハンバート自身が、「[...] あの少女への熾烈な欲情は先天的な異常性格の最初の徴候にすぎなかったのだろうか、くりかえし自分に問いつづける<sup>(21)</sup>」ように、「はしがき」には次のように書かれている。「[...] 彼は変態の人間だ。紳士ではない。しかしわれわれは、著者には嫌悪を感じながらも、彼の奏でるヴァイオリンの調べがロリータへの切々たる愛情をあまりにも魔術的に表現しているので、ついこの本に恍惚としまうのだ<sup>(22)</sup>。」

これはまさにわがスガナレルとアルノルフの心情に対する批評にほかならない。彼等は、美しい少女、ニンフェットに恋をしてしまったのである。異常な恋にとらわれてしまったのだ。そして、この恋は宿命的に成就しないことが神話の中で示されている。

\* \* \*

ここでニンフについて改めて眺めてみよう。ニンフは、ギリシャ神話において、「森や山や河や海や小川に出没する身分の低い女神で、全裸又は半裸の若い女性の姿で現われる<sup>(23)</sup>。」と定義されている。そして、自然の中の棲み家にちなんで、ドリ阿德ス、ハマドリ阿德ス（森のニンフ）、ナイ阿德ス（泉や川のニンフ）、ナベエス（草原のニンフ）、ネレイデス（海のニンフ）、オレアデス（山や洞窟のニンフ）、などがあげられる。「彼女



らは白く美しい裸身を持つ、どちらかと言えば受動的性格の女性である上、神と呼べないほど神格も低いため、世の男性のさまざまな夢や欲望を自在に受け入れさせたようである<sup>(24)</sup>。」そして、醜怪で好色の精、男性の欲情の象徴ともされる下半身が山羊のサテュロスや、馬の尾や耳のあるシレノスに追い廻される運命にある<sup>(25)</sup>。つまり、ニンフは、これら多くのグロテスクな男性どもに「覗き見され、襲いかかられ、凌辱の憂き目に逢っている<sup>(26)</sup>」存在なのだ。

例えば、森のニンフ、ハマドリアデスの中のひときわ高名なニンフ、シュリンクスは、いくたびもサテュロスの追跡をかわしていた。ところがある日、リュカイオスの山からの帰途牧神パン（上半身毛深い男で、有髯、額に両角、下半身は山羊）の口説の言葉をはねつけて逃げたが、ついにラドンの流れに追いつめられてしまう。そして、パンがとらえたものは、変身した川の葦であった<sup>(27)</sup>。

また一方、海のニンフ、ネレイデスの一人、ガラティアは、<sup>キ</sup><sup>ニ</sup><sup>ロ</sup><sup>フ</sup>一つ目の巨人のポリュペモスに恋いしたわれてしまう。単眼巨魁の怪物ポリュペモスの片思いの恋はあわれをさそう。ガラティアは、美少年アキスと恋に落ち、ポリュペモスの目を盗んで密会を重ねる。しかし、怪物の知るところとなり、ガラティアは海に逃げたが、投げつけられた岩の端でアキスは絶命する。その岩の裂目からたけ高い葦が生えてきたという<sup>(28)</sup>。

パンもポリュペモスも、片思いの恋に身を焼く奇怪なる人物であるが、その絵姿もその心情もまさにスガナレルやアルノルフのそれと一致するところである。スガナレルもアルノルフも、ニンフェットに対して満たされることのない愛を抱き、裏切られ、逃げられてしまう運命にあるのだ。これは、神話の世界のニンフの物語に通ずる愛の宿命の物語ということができよう。永遠に理解され報いられることのない美女に対する野獣の恋なの

である<sup>(29)</sup>。

\* \* \*

1662年2月20日、モリエールは40歳にして20歳年下のアルマンド・ベジャールと結婚する。アルマンドは、一座の花形で、モリエールと初めから苦楽を共にしてきたマドレーヌ・ベジャールの妹（または娘）であったから、モリエールは彼女を子供の頃から知っていたことになる。ここにも、ニンフェットに魅せられた中年の男がいたのだ。

モリエールは、同年12月26日『女房学校』を発表するのだが、そこには単に当時の時事問題となっていた娘の教育、娘の結婚の主題を越えて、少女と中年男、ニンフェットとグロテスクという愛のテーマが提示されていたのである。いくら情熱的に愛しても、ニンは醜悪な男の手をのがれて、若くて美しい恋人の方に逃げていってしまう。独占欲も嫉妬心も、恋する男を一層醜く、滑稽にさえしていくのだ。この愛に絶望したあわれな男を描くために、モリエールは他の作品にみられない設定を試みたと言えるだろう。ニンフェットは身無し子であり、後見人は父親役をかねた片思いの恋人だったのである。

そして、モリエールは、この醜怪なるスガナレルやアルノルフを舞台で演じてみせた。この汚れ役こそモリエールが最も得意とする役柄だったのである。モリエールはこのはまり役を演じながら、若いアルマンドにせつない嫉妬の心を燃えあがらせていたのではなからうか。

## 注

- (1) 本稿は平成2年度成城大学特別研究助成による共同研究「ヨーロッパ社会における普遍的原理と地域文化」の研究成果の一部である。
- (2) Suzanne ROSSAT-MIGNOD, *L'Émancipation des Femmes*, in *Europe*, Mai-Juin 1961, p. 117.
- (3) Antoine ADAM, *Histoire de la littérature française au XVII<sup>e</sup> siècle*, tome I, pp. 434-439, pp. 469-504.
- (4) 拙論「亭主像の諸相——スガナレル像の変貌——」成城大学大学院文学研究科『ヨーロッパ文化研究』第7集, 1988, p. 108.
- (5) Robert JOUANNY, *Œuvres complètes de Molière*, Garnier Frères, © 1962, tome II, p. 254.
- (6) *Ibid.*, p. 257.
- (7) *Ibid.*, tome I, p. 654.
- (8) *Ibid.*, pp. 657-658.
- (9) *Ibid.*, tome II, p. 774.
- (10) *Ibid.*, p. 843.
- (11) *Ibid.*, tome I, p. 225.
- (12) *Ibid.*, pp. 225-226.
- (13) *Ibid.*, p. 322.
- (14) *Ibid.*, pp. 412-413.
- (15) *Ibid.*, pp. 322-323.
- (16) *Ibid.*, p. 411.
- (17) *Ibid.*, p. 334.
- (18) *Ibid.*, p. 446.
- (19) *Ibid.*, tome II, p. 96.
- (20) V. ナボコフ, 大久保康雄訳『ロリータ』(新潮文庫2618), 新潮社, p. 25.
- (21) *Ibid.*, p. 21.
- (22) *Ibid.*, p. 10.
- (23) *Petit Robert* の *nymphe* の項目。
- (24) 佐々木英也 責任編集『神話・ニンフと妖精』, 中山公男, 高階秀爾企画・監修『全集美術の中の裸婦』第4巻, 集英社, p. 10.
- (25) 藤縄謙三『ギリシア神話の世界観』(新潮選書), 新潮社, 1971, p. 58.
- (26) 佐々木英也, *op. cit.*, p. 12.
- (27) オウイディウス, 中村善也訳『変身物語』(岩波文庫32-120-1), 上巻, 岩

波書店, pp. 44-45.

(28) *Ibid.*, 下巻, pp. 234-242.

(29) ニンフェットを襲い、ついに射止めてしまった例がないわけではない。例えば、全能の神ゼウスはニンフ・イオに恋し、追いつめる。「神は、闇をひろげて広大な地面を隠し、逃げる乙女をとどめて、純潔を奪った」(*Ibid.*, 上巻 p. 39.)。ゼウスは妻ヘーラーの嫉妬をかわすために、イオをあわれにも白い牝牛に変身させてしまう。また、源氏と若紫もその一例。「[...] 愛する者を信じようとせずに疑いの多い女でなく、無邪気な子供を、自分が未来の妻として教養を与えていくことは楽しいことであろう、それを直ちに実行したいという心に源氏はなった」(與謝野晶子訳『源氏物語』(角川文庫851) 上巻, 角川書店, pp. 149-150.)。源氏は強引に少女を略奪するのであるが、「相手が少女であることを思うと、常識では考えられないことであり、風変わりなすぎごとを通りこして、変態心理的でさえある」(重松信弘『源氏物語のころ』佼成出版社, p. 59.)。しかし、ゼウスや源氏が非難を受けなかったのは、彼等が高貴な特権的人物であり、野獣ではなかったためであろう。